

令和5年度東京都広報コンクール 写真部門 総評

箭内委員

本年度も「東京都広報コンクール・写真部門」へ多数のご応募を頂き、誠にありがとうございました。当部門における今回の参加自治体数は、15区14市2町、計31区市町。これは、多数のご応募を頂いた昨年と同じ数です。皆さま、応募作品のセレクトや「調査票」の記載など、お手間もかかったこととお察し致します。年末のお忙しい中に各々の力作をご応募くださいましたこと、改めて感謝申し上げます。

さて、ここ数年「コロナ禍」の日常があったわけですが、昨年5月に5類となって以降、集団行動などの制限も解除され、ようやく日常生活が戻ってきました。その世相を反映し、今年度の応募作品には、久しぶりに復活したイベントの告知・取材の様子や、住民の集いの場となる施設を扱った作品が多く見られました。そして、それらの「復活」や「集まる」をテーマとした作品からは、待ちに待った歓喜や、地域のパワーが感じられ、改めて人と人とが繋がり合うことの大切さを再認識しました。

当方が審査員を拝命してから数年が経つわけですが、初年度の印象と比べてみて、応募作品全体のレベルが非常に上がっている印象を受けます。特に今年度は、私自身が付けた採点においては、例年にないほど得点が拮抗しました。そして、極端に評価の低い作品が少なかったことも印象的でした。

これはひとえに、広報紙作りに携わっている制作者皆さまの努力の賜物とお見受けします。動きのある被写体には高速Sスピードを選択する、暗い場面ではストロボを積極的に活用する、アングルに気を配るなど、多くの作品から試行錯誤や創意工夫を重ねた表現意図が感じられました。スマホを必要としない場面でのスマホ作品の応募もなくなりました。また、モデルの自然な表情をうまく引き出している作品が多く、それらからは、撮影者がモデルとうまくコミュニケーションをとっていることや、現場の雰囲気づくりに気を配っている様子がうかがえました。

昨年度に続き「調査票」への詳しい撮影データ記載が増えているのも、好ましく感じております。撮影技術の向上は紙面表現の可能性を大いに広げてくれます。データ確認はお手間かとは思いますが、我々審査員が的確なアドバイスを申し上げるためにも、撮影データは重要です。ぜひ今後も、引き続き記載をお願い致します。

いっぽう課題もありました。例えば、非常にハイスペックなミラーレスカメラを使用しながらも暗い現場で ISO 感度を上げず、遅い S スピードに設定して、ブレのリスクをはらみながら露出バランスをとっている例。これは、せっかくのカメラの高性能を活かしきれていないので、お使いのカメラがどこまで ISO 感度を上げられるのか、どの高感度まできれいに表現できるのかといったことを、あらかじめ把握しておくことで改善できます。

また、プリントを拝見するに、撮影した写真自体は明るいだけけれど、印刷紙面を見ると暗くなってしまっている例。これは、普段ご利用されている印刷所の傾向や紙質、発色の仕方、色の吸い方などがあるかと思imasuので、その情報を把握しておくことで、リスクを回避したり、あるいはより良い表現を可能にしたりすることができると思います。

広報紙は公共性を重視する媒体ですが、その中でいかに創意工夫を凝らしながら、写真と文章を組み合わせ、読者の目をひく個性を際立たせられるかという点が、広報紙作りの面白味かとお察しします。そして、してやっつたりの反響が読者からあった時には、それこそがやり甲斐・醍醐味かとお察しします。

ぜひ今後もさらなる撮影技術向上を目指し、地域のため、住民のために、魅力のある紙面作りに励まれることを期待しております。

以上、本年度も精一杯審査をさせて頂きました。

改めまして、たくさんのご応募を頂き、誠にありがとうございました。

鳥原委員

今回の審査について、まず総括していえるのは、写真もレイアウトの両面においても進歩が見られたということです。テーマに沿った写真の選択、見やすく読者の目を惹きつけるレイアウトやフォントの使用などで、とくに幾つかの広報誌は高いレベルを実現していました。調査票を読むと、それらには共通して、取材以前のプランニングが明確にたてられていることに気づきます。また、現場でのコミュニケーションもうまく行っているようです。

写真取材で大切なのはシャッターチャンスをもものにすることですが、その為にも事前の下調べは欠かせません。例えばイベントを撮影する場合、イベントの主目的、ロケーション、プログラムの進行予定、参加者の顔ぶれなどを把握。そのうえで使用する機材を選定し、撮影のアイデアや紙面構想を立てる。さらに現場で被写体になってくれる人を安心させ、撮影の意図を伝えてる必要もあります。組み写真では以上に加えて、ページ全体のイメージをデザイナーと検討する必要があります。いずれにしても広報誌という性格上、取材状況を含め、以前の紙面を参考にできるでしょう。

これらの観点から言えば、一枚写真の部では「広報あきるの」、「ねりま区報」、「広報千代田」、「広報あだち」「広報はちおうじ」などが、そのようなプロセスを丁寧に重ねられているように思いました。また組み写真の部では「市報ちょうふ」、「広報えどがわ」、「広報日の出」、「広報千代田」などの紙面は強く訴えかけるものになっていました。

写真を活用するうえで大事なことはメディアとしての特性を理解しておくことです。例えば写真は説明するよりも直観に訴えることに向いていますから、一枚写真であれば特に、疑問や関心を持たせるという目的で使いたい。また組み写真であればすべての写真を均等にレイアウトするのではなく、軸となるメインビジュアルを設定することで読者の視線を誘導することができます。

また今回、レイアウトでは文字情報の整理が必要なケースが散見されました。写真の上に配された文章や解説の内容や語句が重なっており、そのぶん内容の把握に時間がかかります。それに文字情報が多いとフォントが小さくなり、こと高齢者には読みづらくなります。写真と文字情報との面積なバランスを考えながら、よりよいヴィジュアルコミュニケーションを目指していただきたいと思います。